イヴァンゴロドの建設とロシアのバルト政策

中　村　仁　志

Construction of Ivangorod and the Russian Baltic politics

Hitoshi Nakamura

In 1478 Ivan Ⅲ, the grand prince of Muscovy completed the annexation of Novgorod and gained access to the southeastern shore of the Baltic Sea. From that time on, Ivan and his successors pursued a goal to make Russia one of the great powers in Baltic region. It is construction of Ivangorod in 1492 that set the first stone of building a Baltic power.

Ivangorod, the first Russian maritime port named after Ivan Ⅲ, played great role in the frontier defense and diplomacy of Russia as well as in her foreign trade. Besides Ivangorod situated in the southern shore of the Gulf of Finland, Ivan Ⅲ was eager to have a port in the northern shore of the gulf and made war against Sweden to get rid of Vyborg from it.

はじめに

ロシア人は，中世のキーエフ・ルーシ時代からバルト海と深いかかわりをもっていた。わけても，北ロシアの共和制的な都市国家ノヴゴロドにとっては，バルト海はその命運を左右する重要な交易の場であった。ノヴゴロド市を貫流するヴォルホフ川は北上してラドガ湖へと注ぎ，そこから流れ出るネヴァ川をくだればバルト海にいたる。ノヴゴロドの商人は，ゴトランド島をはじめとするバルト各地の商人を相手に，このルートを往来しながら交易にいそしんだ。

バルト交易の主導権は，13世紀末までにはドイツ系の諸都市の同盟であるハンザに握られる

ようになった。これにともないハンザ商人がノヴゴロド商人の主たる取り引き相手となる。ノヴゴロドは，バルト交易で蓄えた富を背景に「主人・大ノヴゴロド（ゴスポヂン・ヴェリーキー・ノヴゴロド)」として北ロシアの広大な地域を支配する独立勢力でありつづけた。

16世紀後半にはいると，こうした状況に大きな変化が生じる。北東ロシアの諸公国を併呑しながらロシアの新しい統合の中心として台頭してきたモスクワ大公国が，ノヴゴロドの独立を脅かすようになったのである。モスクワの攻勢は，1462年に大公となったイヴァン３世の時代に一段と厳しさをます。1471年のシェロン河畔の戦いに勝利してノヴゴロドに対する優位を決定的なものにしたイヴァン３世は，1478年に最終的にノヴゴロドを併合して代官を置き，かつての都市国家をロシア国家の一部に変えたのである。

かくしてバルト方面におけるロシア勢力の中心は，ノヴゴロドからモスクワにかわり，モスクワを中核として形成されつつあったロシア国家が，リヴォニア騎士団，スウェーデン，デンマーク，ハンザなどのバルト海沿岸の諸勢力と対峙する時代が到来した。

イヴァン３世時代のロシアは，1490年代になると瞠目すべき一連のバルト政策を展開する。1492年にイヴァン３世の名前を冠した城市イヴァンゴロドを建設，1493年にはデンマークと対ハンザ，対スウェーデンを視野に入れた同盟を締結，1494年にはノヴゴロドのハンザ商館を閉鎖，さらに1495年から1497年にかけてスウェーデンと戦火を交えたのである。

こうした1490年代の一連のバルト政策，とりわけ1492年のイヴァンゴロドの建設は，つとに研究者の注目を集めてきた。カザコーヴァは，1493年にロシア=リヴォニア間に条約が締結されるにあたり，リヴォニアがロシアの要求に譲歩した背景としてイヴァンゴロド建設の影響があった可能性を指摘し，イヴァンゴロドの軍事，外交面における意義，さらにはロシアの対外交易においてはたした役割について評価している[1)]。

また，君主が自分の名にちなんだ都市を築いたという共通点から，イヴァンゴロドをピョートル１世が建設したサンクト・ペテルブルグのプロトタイプとしてとらえようとするむきもある。ホロシュケーヴィチは，「イヴァンゴロドの建設は，いくばくかは，2世紀後におこなわれたペテルブルグの建設を思い起こさせる[2)]」とし，イヴァンゴロドを得たことによってロシアは海外との交易を発展させるのが可能になった[3)]という。アレクセーエフも，「最初の『ヨーロッパへの窓』が穿たれた[4)]」と述べて，イヴァンゴロドを「ヨーロッパへの窓」サンクト・ペテルブルグに擬している。もとよりイヴァンゴロドとサンクト・ペテルブルグでは，ロシア史上はたした役割の大きさにおいて比肩のさせようもなかろうが，前者には後者の先駆的意義が求められるというのである。

また，ジミーンも，ロシアは西方の強国リトアニアとのあらたな対決を前にして北方，西北

国境の守りを固める必要があったとして，「1492年のイヴァンゴロドの建設は，ロシア外交の新路線の最初の兆候であった[5)]」と述べ，これを皮切りとする一連のバルト政策の意義を説く。

このようにイヴァンゴロドの建設を契機とする1490年代のバルト政策については，ロシア史上の転機としての性格が強調される。たしかに，それらがもつ革新性，先駆的性格は看過すべきでなかろう。ただ，それと同時に，当時のロシアがおかれていた時代状況，そこからくる政策上の制約にも相応の配慮が払われなければならない。

ノヴゴロド時代からつちかわれてきたロシアとバルトの紐帯，ロシア国家が領域の拡大にともない，あらたに対峙することを余儀なくされるようになった諸勢力との関係，バルト地域の国際関係のネットワークへの参入とそれへの対処，純然たる内陸国として発展してきたモスクワがバルト海という海に臨むにあたっての対応。本稿は，こうした事情を念頭におきながらイヴァン３世のバルト政策の意義を見直そうとするものである。

第１章　リヴォニアとイヴァンゴロド

バルト海は，ヨーロッパの大陸部とスカンジナビア半島に囲まれた内海であり，その東部には東西400キロメートルにわたって細長くフィンランド湾が横たわっている。ノヴゴロドの併合によりモスクワ=ロシア国家は，フィンランド湾沿岸部の南東の一隅を領するようになった。このロシア領バルトは，北方においては当時スウェーデン領であったフィンランドと国境を接していた。一方，ロシア領の西方には，リヴォニアと呼ばれる地域がひろがっていた。現在のエストニア，ラトヴィアにあたるこの地を支配していたのは，ドイツ系のリヴォニア騎士団である。

リヴォニアにおける騎士団の歴史は，ヨーロッパの北東に残る異教の地バルトへの十字軍の担い手として，1202年にリガを本拠として帯剣騎士団が設立されたのにはじまる。バルトにおける異教徒討伐を目的とする騎士団としては，もう一つプロイセンを活動の場として勢力を拡大していたドイツ騎士団があり，1237年に帯剣騎士団とドイツ騎士団は合同するにいたる。しかし，実際のところは，この合同はドイツ騎士団による帯剣騎士団の吸収合併にほかならず，後者は解散のうえドイツ騎士団のリヴォニア支部を構成するようになった。これがリヴォニアのドイツ騎士団，いわゆるリヴォニア騎士団である[6)]。

騎士団はリヴォニアの先住民族を征服しつつ，東方にも勢力を拡大し，ロシア人の勢力圏へと矛先を向けた。帯剣騎士団時代の1223年には，キーエフ・ルーシ時代にヤロスラーフ賢公が築いたユーリエフ（現在のタルトゥ）を奪う。ここは以後ドルパートと改名され，この町を中心に設けられたドルパート司教区は，リヴォニアとロシアの関係において重要な地位を占める

こととなろう。

帯剣騎士団とドイツ騎士団との合体後，騎士団勢力の東方進出の動きはさらに活発となり，1240年にはプスコフを占領し，ノヴゴロドにせまった。これに対してノヴゴロド側はアレクサンドル・ネフスキー公の指揮下に反撃，1241年にプスコフを奪回し，1242年には氷結したチュード湖（ペイプス湖）における「氷上の戦い」で騎士団を打ち破った。これによって騎士団の東進の動きは阻止され，以降ドルパートとプスコフのあいだ，チュード湖とここから北流してバルト海に注ぐナローヴァ川がリヴォニア騎士団とロシア勢力の境界となる。

境界付近における騎士団とロシア勢力の小競り合いは，15世紀にいたるまで断続的につづく。その際，ロシア側の矢面に立ったのが，もともとノヴゴロド領の一部で，1348年以降は独立した公国になっていたプスコフである[7)]。リヴォニアに隣接するプスコフは，ロシアと西方との交易の拠点となる一方で，リヴォニア騎士団の軍事的圧力に対する盾としての役割をはたした。

イヴァン３世によるノヴゴロド併合後の1480年にも，リヴォニア騎士団はプスコフ方面に侵攻してきた。イヴァン３世は，つとに1460年よりモスクワの保護下に入っていたプスコフに援軍を送り，さらに翌1481年にはリヴォニアに対する大規模な攻勢にふみきった。２万名を越えるロシア軍がリヴォニアに進攻し，１ヶ月にわたってこの地を蹂躙した。ロシア軍は，当時騎士団の本拠が置かれていたフェリンにまで到達し，騎士団長がリガに逃走するというありさまであった。「リヴォニアとの戦争の歴史をとおして，はじめてロシア軍は戦略的防御から戦略的攻勢に転じた[8)]」のである。ひるがえってリヴォニア騎士団の側からすると，この敗北はバルト沿岸における騎士団勢力の長期的な衰退の流れの一こまとして理解されよう。

1410年７月にドイツ騎士団は，ポーランド，リトアニア，ルーシの連合軍を相手どってのグルンヴァルト（タンネンベルク）の戦いにおいて決定的な敗北を喫す。さらに1454年にはじまったポーランドとドイツ騎士団の13年戦争も1466年に騎士団側の敗北に終わった。その結果，トルン条約によって西プロイセンはポーランドに割譲されて王領プロイセンとなった。東プロイセンはドイツ騎士団の手に残されたものの，以後，騎士団長はポーランド王に臣従する身となったのである。

かくしてプロイセンのドイツ騎士団は，いちじるしく弱体化した。一方，「15世紀，リヴォニアでは，騎士団はプロイセンにおけるよりもはるかに首尾よく地歩を保った[9)]」ものの，その権力基盤は必ずしも盤石というわけではなかった。リヴォニアにあっては騎士団は，絶対的な支配者ではなく，リガ大司教を筆頭とする宗教勢力，リガ，レヴァル（現在のタリン）などの都市，さらには騎士団には属さない世俗の騎士などと権力を分有していたのである[10)]。

連合体としてのリヴォニアの性格は，1480-1481年のロシアとの戦争の和平交渉に際しても

あらわれた。この時リヴォニア側は，騎士団とならんでリガ大司教，クールランド司教，ドルパート司教などの宗教勢力，リガ，レヴァル，ドルパート，ナルヴァなどの都市からなり，これらの代表として騎士団の使者が和平交渉にあたるべくノヴゴロドにおもむいたのである。その結果，リヴォニアとノヴゴロドのあいだに1481年９月１日に講和が結ばれ10年の休戦が約された。これをうけてプスコフの使者もノヴゴロドにおもむきリヴォニアと和平を結ぶ。また，国境紛争が絶えなかったプスコフとドルパート司教のあいだにも講和がなった[11]。これらが全体として1481年に締結されたロシア=リヴォニア間の10年休戦であり，「伝統にしたがってノヴゴロドとプスコフがロシアを，騎士団とドルパート司教がリヴォニアを代表した[12]」のである。

騎士団とドルパート司教がリヴォニア側の代表となったのは，連合体としてのリヴォニアの性格ゆえである。ではロシアの側についてはどうか。ロシアの支配者であったモスクワ大公イヴァン３世が何故リヴォニアとの講和の相手とならないのか。

プスコフが最終的にモスクワに併合されるのは1510年であり，1481年の時点では形式的にはいまだ独立を保っていた。それゆえプスコフが和平の一方の当事者になるのは不思議ではない。しかし，1478年にはすでにモスクワに併合され，イヴァン３世の派遣する代官によって治められるようになっていたノヴゴロドがロシアを代表してリヴォニアと和するというのは，どういうわけか。この点については従来さまざまな解釈が提示されてきた。

カザコーヴァのように併合後も「ノヴゴロドは外交の分野においては旧来の独立の名残を形式的にはとどめていた[13]」と，かつての独立の残映を見る論者もいる一方，イヴァン３世の外交上の駆け引きという側面を強調する論も多い。例えば，アレクセーエフは，騎士団が神聖ローマ皇帝に臣従していた点を指摘し，「外交上の作法として，国際的な取り決めは法的に同等の国同士で結ばれなければならなかった[14]」とする。騎士団と対等の立場で条約を結ぶべきは，独立国家たるモスクワ大公国ではなく，それより一ランク下の存在，モスクワ大公の代官によって支配されるノヴゴロドというわけである。ボリーソフも「交渉におけるリヴォニアの使節の地位を低めるため，イヴァンはかつてのノヴゴロドの独立の残滓を必要とした[15]」という。

1481年に結ばれたロシア=リヴォニア間の10年休戦の期間が終わりに近づくと，これを更新すべく1491年２月に騎士団長の使節がモスクワをおとずれた。しかし，講和の条件をめぐるロシア=リヴォニア間の交渉は長引き，1493年になってようようあらたな10年休戦が締結された[16]。この長引く交渉のさなかの1492年である。イヴァン３世の名前を冠した町イヴァンゴロドがロシアとリヴォニアの境界に建設されたのは。

イヴァンゴロドの建設は，ロシア北部一帯の防衛強化の一環をなすもので，1491年秋にノヴゴロドであらたに石造りの内城（クレムリ）が完成した後，この工事に従事した職人たちがイ

ヴァンゴロド築城にふりむけられた[17]。イヴァンゴロドは，面積が1600平方メートルと決して大きくはなかったが，当時のロシアでは他に例を見ない正方形の形状をもった要塞で，厚さ3メートルの城壁に囲まれていた[18]。

ナローヴァ川の右岸に築かれたイヴァンゴロドの対岸には，リヴォニア騎士団の所有になるナルヴァの町があり，両市のあいだではナローヴァ川の川幅は130メートルにまでせばまっていた[19]。文字通りリヴォニアを指呼の間にのぞむ距離に出現したロシアの要塞イヴァンゴロドは，リヴォニアに衝撃を与えた。プロイセンの騎士団総長とリヴォニア騎士団長のあいだではイヴァンゴロドの建設を契機としてロシアとの戦争にいたった際の対応について議され，ナルヴァの代官はイヴァンゴロド建設の進捗状況を逐一騎士団長に報告するというぐあいであった[20]。

しかし，結局，リヴォニアは1493年にロシアと休戦条約を結ぶ。1481年にロシアに敗れて10年休戦を結んだ騎士団は，1480年代をつうじて休戦を破ろうとはしなかった。また，1493年にあらたな休戦を結んだ後も1490年代はリヴォニアはロシアとの和平を維持した。リヴォニア騎士団がロシアに対して攻撃をしかけるのは，1501年をまたねばならず，それも前年にはじまっていたロシア=リトアニア戦争に乗じての挙であった。

というようにイヴァンゴロドは，ロシア=リヴォニア間にあしかけ20年にわたる平和が保たれたあいだに建設された城市であった。その点では，この町は対リヴォニア防衛が焦眉の急の課題となっていたなかで築かれたとは言い難い。しかし，イヴァンゴロドには軍事，外交面以外にも重要な役割が負わされていた。それは何よりもまず，この町の立地にあらわれている。

イヴァンゴロドが築かれたのは，ナローヴァ川の下流の右岸で船舶の航行にもってこいの場所，河口のフィンランド湾南岸から12キロメートル遡上した地点であった[21]。すなわち，イヴァンゴロドは，ヨーロッパの国際貿易の北の幹線であったバルト海にむけて開かれた「海港都市」であったのである。

「海港都市」イヴァンゴロドの出現は，ロシア史上画期的な出来事であった。というのも従来ロシアのバルト交易の主役をになったノヴゴロドやプスコフは，海から遠く隔たった内陸の都市であったためである。ノヴゴロドはバルト海から直線距離でも150キロメートル離れており，バルト海に出るのに通常使われるヴォルホフ川，ラドガ湖，ネヴァ川を経由してフィンランド湾にいたるルートは，400キロメートルになんなんとする道のりをたどらなければならなかった。

では，何故ロシアは15世紀の末になって最初の海港都市イヴァンゴロドを築いたのか。それには，当時バルト海における国際交易の支配者であったハンザの諸都市とロシアとの関係が深

くかかわっていた。そこで以下，ハンザとロシアのあいだにいかなる懸案があったかについて見ていくとしよう。

第2章　ハンザ同盟とナルヴァ

中世における北ヨーロッパの国際商業の覇権を握っていたのは，ドイツ系の都市の経済同盟であるハンザであった。ハンザは，加盟都市間のネットワークに加え，ロンドン，ブリュージュ，ベルゲン，ノヴゴロドなどに商館をかまえ，北海からバルト海にかけての国際交易を独占的に支配した。

ロシアとの交易に従事するハンザ商人は，ノヴゴロドやプスコフの商人を相手に取り引きをおこなった。わけてもノヴゴロドにはハンザの商館（聖ペーテル館）がもうけられ，ハンザ商人はここを拠点にして，塩，蜜，ラシャ，酒類，ニシン，銀などを売りさばき，毛皮，蜜蝋などを購入した[22]。

ハンザの中心があったのは，エルベ川からオーデル川にかけてのヴェンデと呼ばれる地域で，リューベックをはじめとするこの地域の諸都市がハンザ全体の指導的立場にあった。その一方，ロシア方面の交易においては，地理的に近いリヴォニアのハンザ都市が主たる役割を担った。わけても重要であったのが，レヴァルとドルパートであり，15世紀なかばからは両市がノヴゴロドのハンザ商館の差配を引き受けるようになった[23]。ノヴゴロドとハンザのあいだで商業上の取り決めをめぐる交渉がおこなわれるさいにも，レヴァルとドルパートの使節がハンザ諸都市の代表としてロシアにおもむいた。

ノヴゴロドとハンザのあいだの交渉で頻繁に問題となったのが，ハンザ側が享受していた商業上の特権，ノヴゴロド側からすれば「不当な」商慣行であった。

たとえば，ハンザ商人がノヴゴロドで商品を販売する場合のラシャの反売り，塩の袋売り，蜜の樽売りなどである。ノヴゴロドにもちこまれたラシャは反単位，塩は袋，蜜は樽単位で売られたが，その際，一反が所定の長さ，一袋，一樽が定められた重量に達しているかどうか計られることはなかったため，ごまかしの温床となっていた[24]。また，ハンザ都市とノヴゴロドでは重量単位が異なっていたが，これもその差を利用してハンザ商人が商品販売の際に利益を上げるもととなっていた。こうした不正利得を防ぐべく，ノヴゴロド側は，商品の長さ，重量の計測をおこなったうえでの販売と度量衡の統一を求めた。

一方，ハンザ商人がノヴゴロドで商品を購入する際の不当な慣行としてやり玉に挙げられたのが，蜜蝋の「くり貫き」と毛皮の「上乗せ」であった。蜜蝋を買いつけるにあたりハンザ商人は，蜜蝋の一部をくり貫いて品質を吟味したが，この「くり貫き」分については，代価を支

払うことなくそのまま我が物としたのである。また，毛皮を購入する際には，購入分以外に若干の毛皮を「上乗せ」として受け取った[25]。こうした慣行は，不良品が混じっていた場合に備えての保険という側面ももっていたが，ハンザ側にのみ認められていたという点で不公正であり，不当な利得を生じさせる原因となっていた[26]。

ノヴゴロドは，こうした商慣行の廃止とならんで，1420年代からハンザに「安全な海路」を求めるようになった。「安全な海路」とは，海上交易に従事するノヴゴロド商人を襲う海賊の取り締まりに責任をもつよう要求したものである[27]。

ノヴゴロドの要求に対してハンザは，自分たちが享受している特権は「旧来のしきたり」であるとして，変更に応じようとはしなかった。

このため，時としてノヴゴロドとハンザのあいだの緊張が先鋭化し，ハンザが加盟都市にノヴゴロドとの交易を禁止し，経済封鎖に出るという事態も生じた。そうした際に，重要な役割を演じたのが，ヴィボルグ（ヴィーボリ）とナルヴァである。ヴィボルグは，当時フィンランドを領有していたスウェーデンがフィンランド湾東部の拠点として築いた都市である。一方ナルヴァは，リヴォニアの都市ではあったが，ノヴゴロドとの交易における競合を恐れるリヴォニアのハンザ都市の反対によりハンザへの加入を許されていなかった。ハンザによる対ノヴゴロド禁輸の決定が出された際にも，ナルヴァとヴィボルグの商人はノヴゴロド商人との取り引きをおこなったのである[28]。

1478年にイヴァン３世がノヴゴロドを併合した際のロシアをめぐる国際交易は上記のような状況であり，その後のロシアの商業政策は，これをひきつぎながら発展させるかたちですすめられていく。その一例が，1481年にノヴゴロドとリヴォニアのあいだで交わされた条約である。

この条約は，前章で見たように政治的にはロシア=リヴォニア間に10年間の休戦を約したものであったが，経済的にも重要な条項を含んでいた。条約ではロシア商人がリヴォニアを自由に往来して円滑に商業活動を営めるよう条件整備をすべく各種の義務がリヴォニア側に負わされた。

とりわけ注目すべきは，リヴォニア都市ナルヴァ[29]にかんする条項である。ナルヴァは，ヨーロッパとロシアの交易の重要な結節点として機能していた。15世紀末にあっては，レヴァルから海路ネヴァ川河口におもむきラドガ湖，ヴォルホフ川を経てノヴゴロドに達する，あるいはレヴァルから南下してドルパートに達し，ここからロシアに商品を持ち込むというルートとならんで，レヴァルから海路ないし陸路を経てナルヴァに達し，ここからロシアに商品を持ち込むというルートがロシアとの交易経路となっていたのである[30]。

1481年の条約は，この交易拠点ナルヴァにおけるロシア人商人の商業活動に対してなみなみ

ならぬ好条件を認めていた。ノヴゴロド商人がロシアとリヴォニアの国境を流れるナローヴァ川に浮かんだ船と船のあいだで商品を購入した場合は税金を免除する。蜜蝋の計量のための度量衡をノヴゴロドのものと合わせる，などである[31]。かくしてナルヴァは，対ロシア交易用の「経済特区」とでもいうべき性格を備えるにいたったのである。

以上のように1481年のノヴゴロド=リヴォニア間の条約は，ロシアにとり交易上大きなメリットをもたらした。ただ，こうした有利な条件をかちえたのは，あくまでこの条約が1480-1481年の戦争におけるロシアの勝利の帰結として結ばれたためにほかならない。問題はここで得た地歩を，どこまで拡大できるかであった。具体的には，これをハンザ，とりわけリヴォニアのハンザ加盟都市にもおよぼせるかどうかにかかっていた。

1481年のノヴゴロドとリヴォニアの条約においては，先述のように騎士団や宗教勢力とならんでリガ，レヴァル，ドルパートなどの都市もリヴォニア側の構成員として含まれており，そのかぎりにおいては条約を無視できない立場にあった。その一方で，これらの都市はハンザの加盟都市でもあったため，ハンザの一員としてロシアと交易条件の交渉をおこなうという選択肢も残されており，実際1487年には後者の立場へと軸足を移す。

1487年にノヴゴロド=ハンザ間であらたな条約締結のための交渉がおこなわれた。その際，ロシア側は，ハンザ商人の特権の廃止や「海路の安全」などノヴゴロドがかねてより出していた要求とともに，1481年にリヴォニアと結んだ条約で獲得した条件をもちだしハンザがこれを認めるよう求めたのである。そのなかには，当然ナルヴァにおける交易の権利も含まれていた。これに対し，ハンザは「旧来のしきたり」をたてに商業上の特権の廃止に応じようとせず，ナルヴァについても，これがハンザ都市ではないと言う理由で交渉の対象外であるとした。

レヴァル，ドルパートなどのリヴォニア都市は，このたびはハンザの一員としてロシアとの交渉に臨み，その後もこの立場を貫こうとした。1493年にノヴゴロド=リヴォニア条約が更新された際にも，これらの都市は1481年の条約の際とは違い，リヴォニアの一員としてこれに加わろうとはしなかった。すでに1487年にハンザの加盟都市としてノヴゴロドと条約を結んだというのが，その理由である[32]。

という事情からすれば，ハンザ，リヴォニア，ロシアの三者の関係のなかでハンザに加盟していないリヴォニア都市ナルヴァが占める特異な立場とその重要性が改めて浮彫りとなろう。

ハンザがロシアとの交渉において旧来の商業特権に固執し，ロシアの要求に譲歩する姿勢をみせない以上，ロシア=ハンザ関係は常に緊張の種をはらんでいる。対立がこうじれば，ハンザはロシアとの交易をボイコットし，経済封鎖に出るであろう。その際，対外交易のメインルートを断たれたロシアが通商路を維持するためのバイパスのルートとして頼りにするのは，ハン

ザの方針に従う義務がないリヴォニア都市ナルヴァである。

ただし，ナルヴァがバイパスたりえるのは，ロシアがハンザと対立した際にもロシアとリヴォニア騎士団との関係は正常に保たれているという前提に立っての話である。言いかえれば，レヴァル，ドルパートなどのリヴォニアのハンザ都市と騎士団とが対ロシア交易をめぐってそれぞれ独自の思わくで別行動をとるというのが条件となる。もし，両者が歩調を合わせ，共同して対ロシア経済封鎖にでれば，ロシアはリヴォニアにおける対外交易の足場を失ってしまう。そうした危険に備えるためには，ロシアはバルト商業用にリヴォニア都市の代替となりうる自前の交易拠点をもたねばならない。そこにこそ，ナルヴァの対岸に築かれた「ロシア最初の海港都市」イヴァンゴロドの意義が求められるのであり，「イヴァンゴロドの建設は，ロシアから他のヨーロッパ諸国へと通じる海路をハンザが独占しているという状態に風穴を開けた[33]」のである。

逆にリヴォニア諸都市の側からすれば，ロシアがイヴァンゴロドを窓口として，西方との交易を発展させるのは，その存亡にもかかわる大事であった。ハンザ都市であるかないかの別に関係なくレヴァル，ドルパート，ナルヴァなどのリヴォニア都市の繁栄は，ロシアと西方のあいだの中継貿易が生む利益のうえに築かれたものであった。それゆえ，「イヴァンゴロドをとおしてロシア商人と外国商人が直接取り引きをするようになれば，全リヴォニア商人の破滅をもたらしかねなかった[34]」のである。そのため，ハンザ同盟は厳しい禁則をしき，加盟都市の商人がイヴァンゴロドをつうじてロシアと交易するのを許さなかった。違反者は海賊――ハンザの私掠船の襲撃にさらされたのである[35]。

かくして自前の交易拠点をもとうとするロシアとこれに対するハンザの反発とが交錯するなかイヴァン３世は，バルト方面においてやつぎばやに経済，外交政策を展開する。1493年には，リヴォニア騎士団との10年間の講和を更新するとともに，デンマークと同盟を締結した。そして翌1494年には，ついにノヴゴロドのハンザ商館を閉鎖させたのである。

ノヴゴロドのハンザ商館の閉鎖にともない，かの地に居あわせたハンザ諸都市の商人49人が捕らわれ，9万6000マルク相当の商品を没収された。また，当時ハンザの73都市を代表して交易条件の交渉のためロシアに派遣されていたドルパートとレヴァルからの使者も，身柄を拘束された。これらの措置は，同年レヴァルにおいてロシア人２名が，同市の法にもとづいて有罪の判決を受け処刑されたのに対するロシア側の反発として取られたものである。このため，身柄を拘束されたくだんの使者のうちドルパートの使者がほどなく解放され帰国したのに対し，レヴァルの使者はロシア人処刑の責を問われ獄につなぎおかれつづける。

1494年のハンザ商館の閉鎖は，イヴァン３世期のロシアにおける重要事件として，つとに注

目を集めてきた。事件の直接の引き金は，レヴァルにおけるロシア人処刑であったものの商館閉鎖という強硬な策がとられるにいたったのにはそれなりの背景，理由があったはずと考えられており，つとに帝政期のロシア史研究の泰斗ソロヴィヨフが，商館閉鎖はロシアと対スウェーデン同盟を結んだデンマーク王の使嗾によるものとした[36]のをはじめとして，さまざまな原因論が唱えられてきた。

カザコーヴァは，1975年にあらわした『ロシア=リヴォニアおよびロシア=ハンザ関係　15世紀末－16世紀初』のなかで従来のハンザ商館閉鎖の原因論に通底する共通点として，イヴァン３世は明確な政治的意図をもって商館の閉鎖を命じたとみなしているとし，その見直しを主張している。それによれば，ハンザとの交易条件をめぐる問題は交渉によって解決しようというのがイヴァン３世の立場であり，商館閉鎖はリヴォニアにおけるロシア商人の法的処遇に対するイヴァン３世の不満を引き金として起こったのであって，あらかじめしくまれたものではないという[37]。商館閉鎖は，明確な政治的プランにのっとっておこなわれたのではなく，なかば偶発的に生じたというのである。

また，ボリーソフも著書『イヴァン３世』のなかで商館閉鎖を納得しがたい行為であると述べ，慧眼の士として政治的能力を高く評価されてきたイヴァン３世といえども人の子であるとして判断ミスの可能性すら示唆している[38]。

いずれにせよ，ハンザ商館の閉鎖は独立国家時代のノヴゴロドにはとりえなかった荒療治である。ハンザとの交易条件にどれほど不満があったにせよ，商館を閉じるのは通商を命綱とする商業立国のノヴゴロドには自殺行為である。一時的な取り引き停止程度ならばともかく，ハンザとの交易拠点の閉鎖にまで踏み切れるものではない。その点，ノヴゴロドのあらたな支配者となったイヴァン３世は違う。農業中心の内陸のモスクワで育った君主は，さほどの痛痒を感じることなく商館閉鎖の断を下せたのであろう。

また，15世紀末にはロシアが対外交易の舞台をノヴゴロドから西方にシフトしつつあった点も考慮に入れなければならない。イヴァン３世は，ナルヴァをはじめとするリヴォニアでの交易条件の整備やイヴァンゴロドの建設などをつうじて西方に対外通商の拠点を築きつつあった。このため，旧来のノヴゴロドのハンザ商館をつうじての交易に拘泥する理由はなくなっていたのである。

第３章　ヴィボルグ包囲とイヴァンゴロドの陥落

ノヴゴロドのハンザ商館閉鎖の後，ロシアのバルト政策はどのような展開を見せたのか。

商館閉鎖とそれにともなう商人の逮捕，商品の没収は，ハンザ側の激しい反発を引き起こす。

ハンザの中心であるヴェンデ地域の諸都市の総会においてロシアとの交易が禁止され，リヴォニアのハンザ都市にも同調が求められた。

しかし，この禁輸措置はロシアの対外交易に決定的なダメージを与えるにはいたらなかった。というのもハンザ以外に交易のバイパスが存在したためである。

その一つが，ハンザと対立関係にあったデンマークである。商館閉鎖の前年の1493年にロシアはデンマークと同盟条約を結び，両国間の自由貿易を約していた[39]。これにもとづき，13世紀以降とだえていたロシアとデンマークの通商関係が復活し，デンマークの商人がロシアを訪れるようになった[40]。

また，騎士団の支配下にあるリヴォニア都市でハンザに加盟していなかったナルヴァは，対ロシア禁輸には拘束されずロシアとの交易をつづけた。さらに，ハンザ都市のなかでもプスコフとつながりの深かったドルパートは，プスコフとの交易をつづけた[41]。このように禁輸の実効性があがらなかったため，1495年夏には対ロシア禁輸は解除される。その一方，ハンザとロシアとの緊張関係はつづき，1498年にナルヴァでおこなわれた両者の和解交渉も不調に終わった。

ハンザ商館閉鎖の翌1495年，ロシアのバルト政策の矛先は北西に向かう。フィンランドへの進出をめざしてのスウェーデンとの戦いである。当時，フィンランドを含むスウェーデンを支配していたのは，「王国統治者」の地位にあったステン・ステューレである。「王国統治者」なるいささか奇妙な響きのする地位は，本来，王の不在中に代理を勤めるべき職であり，北欧の君主の座をめぐる独特の事情の産物であった。

14世紀の末以来，北欧ではデンマーク王がノルウェー，スウェーデンの王位にも就くというかたちでの3国の連合体制，カルマル連合が成立していた。このうちノルウェーは19世紀の初頭にいたるまで連合の枠内にとどまり，デンマーク王を共通の君主として戴きつづけた。これに対し，スウェーデンではつとに15世紀より連合離脱の動きが活発で，自立の道が模索された[42]。「王国統治者」ステン・ステューレによる支配も，そうした試みの一つとして理解されよう。これに対し，1481年にデンマーク王位についたハンス（1483年よりノルウェー王も兼ねる）は，ステン・ステューレを追って，スウェーデン王として戴冠する機会をうかがっていた。

つまり，1493年に成立したロシア=デンマーク同盟は，一方でフィンランドに進出しようとするロシア，他方でカルマル連合再興をもくろむデンマークが，共通の敵たるスウェーデンにあたるための攻守同盟であり，以降バルト地域において何度か再現される同盟関係となっていく。

1495年にスウェーデンと開戦したロシアは，フィンランド湾北部における西方への領域拡大

と交易拠点の獲得をめざした。その際，焦点となったのが，フィンランド湾の北東部に位置するヴィボルグである。1293年にスウェーデン人が建設したヴィボルグは，ロシア勢力（当時はノヴゴロド）との係争地であったカレリアの西半をおさえるための要衝としての役割をはたした[43]。その一方，ロシアとの国境に近いヴィボルグは，ロシアとの交易の拠点としての機能ももっていた。とくにハンザ同盟がロシアに対して禁輸措置をとった際には，ハンザに属さないナルヴァとならんでヴィボルグはロシアの対外交易のバイパスとして重要な役割をになったのである。

仮にロシアがヴィボルグを手中に納めれば，イヴァンゴロドとあわせてフィンランド湾の東部沿岸一帯の領域支配を固めるとともに湾の南北に交易拠点を保有することとなろう。 また，東方からロシアがフィンランドに進出する一方で，西方のデンマーク王ハンスがステン・ステューレを追ってスウェーデンを支配下に置けば，ロシアとデンマークは，スカンジナビア半島南部からフィンランド湾の深奥部にいたるまでバルト海の北岸を東西につらぬくルートで結ばれることとなろう。となれば，ヴェンデからプロイセン，リヴォニアにかけてバルト海南岸に数珠つなぎにつらなっているハンザ諸都市のネットワークに対抗するのも不可能ではない。

しかし，実際には，1493年に結ばれたロシア=デンマーク同盟によるスウェーデン挟撃は若干の成果を得るにとどまった。

デンマーク側では，デンマーク王ハンスが1497年にスウェーデン王位につき，北欧３国の君主となった。しかし，この復活した北欧の連合体制は４年しかつづかない。1501年にステン・ステューレはクーデタによって権力を奪い返し，以降1520年までステューレ家がスウェーデンにおける統治の実を握った。その後，一時的にデンマーク王の支配が復活したものの，1523年に成立したヴァーサ朝の歴代君主のもとスウェーデンは強国への道をたどり，デンマークをはじめとする周辺諸国を圧倒してバルト海帝国を築く。

一方ロシアである。1495年９月にヴィボルグ包囲をはじめたロシアは，これを陥れるため，なみなみならぬ力を傾けた。６万人と伝えられる大兵力がヴィボルグ包囲に投入され，占領が試みられた。55歳と当時としては高齢であったイヴァン３世も，遠方より届けられる戦果を待つのではなく，戦場の近くに身を置きロシア軍を督励した。1495年10月にモスクワを発ったイヴァン３世は１ヶ月かけてノヴゴロドに到着，ここからヴィボルグ攻撃を見守るという熱の入れ方であった。ボリーソフが言うには「モスクワの君主の虎の子であったバルト計画の運命のすべてが，事実上，ヴィボルグの城壁の下で決められた[44]」のである。しかし，結局ロシア軍はヴィボルグを攻略するにはいたらず，12月末には囲みを解いて撤退した。

ロシア軍の攻勢は翌1496年にもつづき，フィンランドの各地に兵をすすめた。これに対し，

スウェーデン軍は意表を突く作戦で反撃に出る。フィンランドを主戦場にしてロシア軍を迎え撃つのではなく，ヴィボルグから船でフィンランド湾を横切り，南岸のロシアの要衝イヴァンゴロドを急襲したのである。

1496年8月，70隻の船団に分乗した数千名の兵士がナローヴァ川を遡上し，イヴァンゴロドの近くに上陸した。ヴィボルグから来襲したスウェーデン軍である。不意を衝かれたイヴァンゴロドは，1週間にわたる包囲戦のすえ陥落した。当時イヴァンゴロドには，交易用に毛皮と蜜蝋の大量の在庫が貯えられていた。包囲戦の際の火災でおびただしい量の蜜蝋が溶け出したのが川のように流れ，その上をボートですすめるほどであったという[45]。

イヴァンゴロドが襲われるとの報に接したロシアは急遽援軍を派遣したが，援軍が到着したのは，時すでに遅くスウェーデン軍はイヴァンゴロドを破壊し毛皮その他の商品からなる莫大な戦利品をもって海路撤収した後であった。

「バルトにおける『ロシアの夢』のシンボル[46]」であったイヴァンゴロドの落城は，ロシアに大きな衝撃を与えた。ロシア政府はすみやかにイヴァンゴロドの再建工事をすすめ12週間後には竣工した[47]。さらに，イヴァンゴロドの防衛力を高めるべく，もとの正方形の要塞よりもはるかに巨大な長方形の城市を付け城として築く[48]。また，イヴァンゴロドのあるフィンランド湾南東部の兵力も増強された。

カザコーヴァは，イヴァンゴロドに来襲したスウェーデン軍に対してナルヴァが，心情的な支援をしたのは言うにおよばず，物理的な援助もおこなったと考えられるふしがあるという[49]。たしかにリヴォニア側からすれば，突如としてナルヴァの対岸に出現したロシアの城塞は，目障りな存在であったに違いない。イヴァンゴロドを「ナルヴァへの脅威[50]」とあだ名したリヴォニアのドイツ人が，スウェーデン軍による占領を望んだとしてもあながち不可思議ではない。

また，イヴァンゴロドを占領したスウェーデン軍がその後もこれを確保しつづけていれば，ロシアとリヴォニアのあいだにスウェーデンの軍事拠点がくさびとして打ち込まれるかたちとなり，リヴォニアに対するロシアの脅威は，かなり減じたはずである。しかし，スウェーデンは，イヴァンゴロドの保持をあきらめて撤退する。

結局，ロシアはイヴァンゴロド陥落の翌1497年3月にスウェーデンと和議を結び，1495年からはじまった戦争を終結させた。その一方で，この戦争はロシアとリヴォニアとの関係に思わぬ余波をおよぼす結果となった。

スウェーデンとの戦争にそなえるべくロシアは，1494年よりノヴゴロド，イヴァンゴロド方面に兵力を集結させた。こうしたロシアの動きは，リヴォニアにおいて不安が醸し出される原因となった。リヴォニアに近い同方面への兵力集中は，ロシアのリヴォニア侵攻の兆しではな

いかと受けとめられたのである。1494年よりリヴォニア騎士団指導層やナルヴァ，レヴァルなどの諸都市のあいだで，ロシアがリヴォニア攻撃の準備をすすめているとの報がるる流れた。いわくイヴァン３世がリヴォニア攻撃用の船隊を建造すべく造船工の徴募を命じた，いわくイヴァンゴロドへと通じる巨大な軍用道の建設を命じた等々[51]。

こうした状況のなかで1495年８月，スウェーデン軍によるイヴァンゴロド占領が生じた。その後のロシアによるイヴァンゴロドの再建，補強とイヴァンゴロド方面への兵力集中という事態の成り行きは，リヴォニアのロシアに対する危惧の念をさらにかきたてた。このためリヴォニアは，1494年に騎士団長に選出されたヴォルター・フォン・プレテンベルクのもと，ロシアとの対決もやむなしとして，その準備に傾倒していく[52]。リヴォニアが単独で戦うには巨大すぎるロシアを相手にするための適当な同盟国が捜し求められたのである。

その結果，リヴォニアが選んだパートナーが，1500年からロシアと戦争中であったリトアニアである。リヴォニアはリトアニアと攻守同盟を結び，1501年に対ロシア戦に参戦する。かくして，ロシア=リトアニア戦争と並行して1501年から1503年にかけてロシア=リヴォニア戦争がバルト沿岸を舞台として戦われるというしだいとなる。1481年の和平条約締結以来ロシアとリヴォニアのあいだに20年にわたってつづいてきた平和が崩れたのである。

ルーシの地の統一という目的を追求するうえでリトアニアとの対決が不可避であったイヴァン３世のロシアは，北方のリヴォニアに対しては平和的な通商関係を維持しようとした[53]。しかし，そうした外交方針はイヴァン３世の治世の晩年には一頓挫をきたしたのである。

対リヴォニア戦争終了後の1505年にイヴァン３世は死亡し，息子のヴァシーリー３世が後を継ぐ。ヴァシーリー３世は，リトアニアとの戦いを継続しながら父の残した「ルーシの地の統合」の事業をほぼ完成させ280万平方キロメートルにおよぶ広大な領土を支配下に置くようになる。

その一方で，ヴァシーリー３世はハンザとの関係の正常化をはかり，1514年にはノヴゴロドのハンザ商館を再開させた。こうした対外交易における状況の改善をうけて，「ロシア最初の海港都市」であるイヴァンゴロドにおける交易活動も1514年以降，大いに活況を呈し，対岸の都市ナルヴァに経済的な脅威を与えるまでになっていく[54]。

その際，イヴァンゴロドにはロシアのステープル（法定市場）として，対外交易における格別の地位が与えられた。ロシア政府は，ロシア人，ドイツ人の商人に対し，西方向けの商品を直接ナルヴァに持ち込まず，イヴァンゴロドに立ち寄るように命じ，イヴァンゴロドのステープルをとおしてロシアから西方へと輸出される商品の流れを掌握するようになったのである[55]。

お わ り に

イヴァン３世は，1478年に北部ロシアの都市国家ノヴゴロドの併合を完了した。これよりロシア国家のバルト方面への本格的な関与がはじまる。当時，ロシアがバルト海沿岸で対峙したのは，フィンランド湾北岸を領するスウェーデン，そしてフィンランド湾の南岸を政治的，経済的に支配するリヴォニア騎士団，ハンザなどのドイツ系勢力であった。1480年代はじめにリヴォニア騎士団と干戈を交えたロシアは，その後ほぼ20年間にわたって騎士団との和を保つ。一方，ハンザに対しては交易条件をめぐって角逐をくりかえした。

ハンザは，13-15世紀にかけバルト海を舞台に東欧と西欧の仲介貿易を独占的に支配した。ヨーロッパ北部の各地に交易拠点となる都市をもち，それらが共通の商業政策で結ばれたネットワークを形成していたこと，海上交易のための船団，それも海賊等の危険に備えて防衛力を備えた強力な船隊をもっていたこと，ハンザはこうした商業上の優位を背景に交易相手に対して自己に有利な取り引き条件を受け入れさせた。ノヴゴロドにもうけられたハンザ商館でハンザの商人が享受していた特権的な商業慣習は，その典型であろう。

ノヴゴロド併合後のイヴァン３世は，こうした商業上の不利を是正すべく，たびたびハンザと交渉したが，「旧来のしきたり」をたてにとるハンザの譲歩を引き出すことはできず，ついにはノヴゴロドのハンザ商館の閉鎖という強硬手段を取るにいたる。

イヴァン３世のバルト政策は，ノヴゴロドにおけるハンザとの交渉と並行して西方に交易拠点を確保するというかたちでもすすめられた。ロシアは，1481年にリヴォニアに攻め込んで10年講和を結ばせるなど西方のリヴォニア騎士団に対して優位に立つようになっていた。これを背景にロシアは，リヴォニア都市であるナルヴァにおいて有利な交易条件を獲得し，さらに，これをハンザ都市をも含めたリヴォニア全体に拡大しようとする。その一方，リヴォニアと敵対してナルヴァでの交易が途絶した場合に備え，ナルヴァの代替となるべき自前の交易拠点を保有すべく1492年にイヴァンゴロドを建設した。

西方に交易拠点を確保しようとするロシアの動きは，フィンランド湾南岸のリヴォニアだけでなく，湾北岸のスウェーデン領フィンランドでもすすめられた。ここでロシアが獲得を目指したのはヴィボルグであり，1495年には大軍を発してヴィボルグを囲んだが攻略には失敗する。

ナルヴァといい，ヴィボルグといい，ともにハンザには加盟していない都市であった。このため，ハンザ諸都市がもつ商業上の権利は享受できず，その点，交易条件の面においては劣位な立場におかれていた。ただし，両都市はフィンランド湾の東部に位置してロシアと近接するという地理的利点を持っており，ハンザが対ロシア禁輸をおこなった場合には，ロシアへのバ

イパスの交易ルートとして機能した。イヴァン3世が我が物にしようとしたのは，このバイパス・ルートであり，第二のナルヴァとしてその対岸にイヴァンゴロドを築く一方でヴィボルグの獲得をもめざしたのである。

イヴァン3世時代のロシアは，かつてのルーシの地をふたたび統合するという目的をもって西方の隣人のリトアニアと戦った。これに対し，バルト沿岸におけるロシアの西方への進出は，商業政策の性格を色濃く帯びており，東欧と西欧の中継貿易を独占的に支配するハンザと対決した。

とはいえ，バルト海沿岸への進出をはたしたばかりのイヴァン3世時代のモスクワ=ロシアは，海洋国家ではなかったのはもちろん，後代のピョートル1世時代のような，周辺諸国が一目おくような船団を擁する海上勢力でもなかった。15世紀末，バルト海においてロシア最初の船隊を建造しようとする動きはあったものの[56]，多少とも本格的な船隊をもつにはいたらなかった[57]。このため，ロシアが現実にとりえる政策のはばには，おのずとかぎりがあった。デンマークのような勃興しつつある海上勢力と連携をはかりつつ，陸上で西方への接近をはたすというのが，それである。

バルト沿岸において西方に交易拠点を獲得し，ハンザ以外の通商勢力を迎え入れる体制を整えるのと並行して地理的に西方市場に近づきハンザの中継の余地をせばめる。これが，もともと内陸勢力として発展してきたモスクワ=ロシアがハンザに対してとりえた現実的な対抗策であった。

注

1）Н. А. Казакова. Русско - ливонские и русско - ганзейские отношения. Конец XIV – начало XVI в. Л., 1975, с. 178-79.

2）А. Л. Хорошкевич. Русское государство в системе международных отношений конца XV ～ начала XVI в. М., 1980, с. 139.

3）Там же, с. 144.

4）Ю. Г. Алексеев. Государь Всея Руси. Новосибирск, 1991, с. 183.

5）А. А. Зимин. Россия на рубеже XV ～ XVI столетий. М., 1982, с. 104.

6）帯剣騎士団以来のリヴォニア騎士団とドイツ騎士団のバルト方面での活動については，山内進『北の十字軍 ――「ヨーロッパ」の北方拡大』（講談社，1997年），Eric Christiansen, *The Northern Crusades-The Baltic and the Catholic Frontier 1100-1525,* London, 1980; W. Urban, *The Baltic Crusade,* Chicago, 1994　参照。

7）イヴァン3世期のプスコフについては，Б. Б. Кафенгауз. Древный Псков. М., 1969　参照.

8）Ю. Г. Алексеев. Указ. соч., с. 142.

9）Eric Christiansen, op. cit., p. 240.

10）連合体としてのリヴォニアの政体とその住民については，David Kirby, *Northern Europe in the Early Modern Period: The Baltic World 1492-1772,* London and New York, 1990, pp. 43-46, Eric

Christiansen, op. cit., pp. 196-208　参照。

11) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 163-66.

12) А. А. Зимин. Указ. соч., с. 71.

13) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 166. .

14) Ю. Г. Алексеев. Указ. соч., с. 143.

15) Н. Борисов. Иван Ⅲ. М., 2000, с. 507.

16) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 170-79.

17) Н. Борисов. Указ. соч., с. 508.

18) В. В. Косточкин. Древние русские крепости. М., 1964, с. 114-18.

19) Там же, с. 126.

20) В. Н. Балязин. Политика Иван Ⅲ в Юго - Восточной Прибалтике. 《Вестник МГУ》, сер. Ⅸ, история, 1964, № 6 . с. 91.

21) В. В. Косточкин. Указ. соч., с. 111.

22) ハンザとノヴゴロドの交易についての我が国における研究としては，小野寺利行「中世ノヴゴロドにおける『外国人裁判』の変遷とハンザ商館の衰退」『駿台史学』№101, 1997年，「13世紀ノヴゴロドの対ハンザ通商政策」『ロシア史研究』第64号，1999年，「12世紀末－13世紀後半ノヴゴロドの対ハンザ通商条約 ――『基本条約』の成立年代をめぐって ――」『比較都市史研究』19巻１号，2000年，柏倉知秀「中世リーフラント・ロシア内陸交易 ―― 13世紀末・14世紀初頭のハンザ都市リーガを中心に」『立正史学』第86号，1999年などの一連の論稿を参照。とりわけ，一番目の論稿は，ノヴゴロドにおいてハンザ商人とノヴゴロド人とのあいだで係争が生じた際の裁判手続きの移り変わりの分析をつうじて13世紀から15世紀にかけてのノヴゴロドとハンザの関係を明らかにしつつ，15世紀がハンザの停滞期か繁栄期かという問題についても光を当てようとしたもので興味深い。

23) Artur Attman, *The Russian and Polish Markets in International Trade, 1500-1650*, Göteborg, 1973, p.34.

24) Н. А. Казакова. Из истории торговой политики Русского централизованного государства XVв. 《Исторический записки》, т. 47, 1954. с. 263-64.

25) 毛皮1000枚につき約30枚が「上乗せ」された（А. Л. Хорошкевич. Указ. соч., с. 69).

26) Н. А. Казакова. Указ. ста., с. 263.

27) Она же, Из истории сношений Новгорода с Ганзой в XVв. 《Исторические записки》, т. 28, 1949. с. 123-25.

28) Там же, с. 122.

29) ナルヴァについては，В. Косточкин. Нарва. М., 1948 参照.

30) Artur Attman, op.cit., p.33.

31) Н. А. Казакова. Русско - ливонские и русско - ганзейские отношения, с. 167-68.

32) Там же, с. 176.

33) А. Л. Хорошкевич. Указ. соч., с. 139.

34) Н. Борисов. Указ. соч., с. 508.

35) Там же, с. 509.

36) С. М. Соловьев. Сочинения. книга Ⅲ. М., 1989. с. 127.

37) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 261-62, 270-71.

38) Н. Борисов. Указ. соч., с. 512.

39) Н. А. Казакова. Русско - датские торговые отношения в конце XV－начале XVI в.　В кн.

《Исторические связи Скандинавии и России(IX－XXвв.) Л., 1970. с. 89-92.

40) И. П. Шаскольский. Экономические связи России с Данией и Норвегией в IX－XVII вв. В кн.《Исторические связи Скандинавии и России(IX－XXвв.) Л., 1970. с. 15-17.

41) Н. А. Казакова. Русско - ливонские и русско - ганзейские отношения, с. 274.

42) スウェーデンの連立離脱の動きとステン・ステューレについては，Franklin D. Scott, *Sweden the Nation's History*, Southern Illinois University Press, 1989. pp.87-101 参照。

43) И. П. Шаскольский. Борьба Руси за сохранение выхода к Балтийскому морю в XIV в. Л., 1987, с. 12-13.

44) Н. Борисов. Указ. соч., с. 515.

45) Е. А. Савельева. Книга Олауса Магнуса《История северных народов》и ее известия о России. В кн.《Исторические связи Скандинавии и России(IX－XXвв.) Л., 1970. с. 335.

46) Н. Борисов. Указ. соч., с. 519.

47) В. В. Косточкин. Древние русские крепости, с. 120.

48) Там же, с. 121-24.

49) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 210-11.

50) В. В. Косточкин. Указ. соч., с. 111.

51) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 205-207.

52) ヴォルター・フォン・プレテンベルクについては，Eric Christiansen, op. cit., pp. 245-48 参照。

53) Н. А. Казакова. Указ. соч., с. 204-205.

54) А. Л. Хорошкевич. Указ. соч., с. 61-62.

55) И. Э. Клейненберг. Серебро вместо соли. Элементы раннего меркантилизма во внешнеторговой политике Русского государства конца XV－начала XVI в.《История СССР》, 1977, № 2, с. 124.

56) А. А. Зимин. Указ. соч., с. 106.

57) А. Л. Хорошкевич. Указ. соч., с. 140. イヴァン3世とヴァシーリー3世時代のロシアの艦隊建設の試みについては，А. Л. Хорошкевич. Борьба России за создание флота на Балтийском море в конце XV－начале XVI в.《Военно-исторический журнал》, 1974, № 5 参照.